

お徳は片手に長箒ながほうきを持ち、小脇に塩の入った壺つぼを抱えた。おさんとおもんはてんで白鉢巻あかだすきと赤襷あかだすきをきりと締め上げ、大きな熊手を携えている。

「そら、行くよ！」

かけ声も勇ましくお徳が足を踏み出すと、それに続く娘たちは口を揃えて「はい、おかみさん！」と応じたが、その声はかすれて裏返っており、頬からは、真冬に水ごりをとる行者みたくに血の気が抜けている。それでなくても色白の顔に黒子の数はくろが多いのを気にしているおさんだから、こうなるとまるつきり豆大福が着物を着ているような景色だ。

お徳は意気軒昂いきけんかうだった。肩を怒らせて振り返ると、檄げきを飛ばす。

「何だよあんたたち、そのへろへろ声は。もつと下っ腹に力を込めて返事をおし！」

「はあい、おかみさん！」

半分方、泣き声である。

のしのし歩くお徳と、付き従う半べそ顔の娘たちを、幸兵衛長屋の有志一同が列をなして送り出す。長屋の木戸から外へ出ると、そこには近隣の町家や商店の者たちが同じようにして並んでおり、固唾を呑んでお徳一行の行進を見送っている。列の先頭はこの道の先、南辻橋のたもとに  
いるはずだ。

口を真一文字に結んだお徳は、そうした人びとから折々に声をかけられても無言のまま、きつと行く手に目を据えているが、おさんとおもんは、

「おさんちゃん、頑張れ！」

「お徳さんの言うとおりにすりゃ、大丈夫だからね、おもんちゃん」

などと励ましの声をかけられるたびに、本格的に泣き出しそうになるのを懸命にこらえている。

お徳の店の得意客の女が、列のなかからさつと出てきて、おさんとおもんの首に何かを掛けた。見れば、一粒一粒が子供の目玉ほどありそうな首念珠である。

「これで仏様がお守りくださるから」

素早く囁いて戻る女に、お徳が足を止めてどすの利いた声を放った。

「だったらあんたがそいつを首に掛けて手伝ってくれたっていいんだよ」

女はうひゃあと声をあげ、家のなかまで逃げ込んでしまった。

練り歩くような次第になってしまったが、幸兵衛長屋から南辻橋まで、実はさしたる距離はない。お徳はすぐに橋のたもとに着き、このおかしな沿道の行列の先頭にいる幸兵衛と顔を合わせる事となった。しわい屋で知られる老差配人は、胸もとに大事そうに小さな瓶を抱えている。中身は酒である。それぐらい差配さんが都合しろと、お徳が頼むというより言いつけたのだ。

「本当にやる気かね？」

ちまちまと目をしばたきながら、幸兵衛はお徳に問いかけた。

「放つとくわけにはいかないでしょう。差配さんも、あれを何とかするのを手伝ってくださいよ」

言っではみたものの、期待はしていない。お徳が「あれ」と顎をしゃくった、橋のたもとのあるものに、幸兵衛は目をやるうときえしないのだ。完全に腰が引けている。

お徳は差配人の顔に向かってフンと息を吐くと、傍らの人びとを見回した。一同が亀の子のように首を縮める。

「おさん、おもん」

お徳は箆を足元に置くと、「あれ」と示したもののそばへと歩み寄った。

「こっちへおいで」

おさんとおもんは、そばにいる人に熊手を預けて、そろりそろりとお徳に近づく。二人してお徳の背中に隠れようとするのだが、いくらお徳が太りじしでも、それは無理というものだ。右肩におさん、左肩におもんがすがりついている格好で、お徳はすつくと立ち、足元のあるものを見つめた。

お徳の背で、二人の娘は目をつぶっている。

「ねえ、名無しの権兵衛さん」と、お徳は足元のものに話しかけた。「あんたとしちや無念でたまらないんだろうけど、こう執念深くされちゃ、近所のあたしらはたまらない。渡る世間に鬼はなし、情けは人のためならずってさ、あたしらもあんたに悪いようにはしないから、あんたもい

い加減でここから立ち去っちゃくれないかね」

小脇に抱えた壺を持ち直して、そのなかに右手を突っ込み、ひと握りをつかみ出す。そして真っ白な雪のような塩を、あるものの上に振りまいた。

「さ、拝むんだよ」

お徳に促され、おさんとおもんは目をつぶったまま手を合わせた。

「なまんだぶ、なまんだぶ」

「なまんだぶ、なまんだぶ」

列をなした人びとも唱和した。調子のずれた「なまんだぶ」が、高く低く響いてゆく。梅雨もとうに明けてカラッと晴れた青空の下、じつと頭を垂れて念仏を唱えていると、すぐにも額に汗が滲んでくるような陽気である。

と、そのとき、それらの声に、一段突き抜けたような美声が混じった。雀のさえずりに、ヒバリが一羽加わったかのようだ。

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

驚いた一同は、声の主を探して目を上げた。八丁堀の巻き羽織の同心が一人、いつの間にか橋を渡ってこちら側に来ている。お徳たちの向かいに立って、足元のあるものにはほとんど無関心な表情で、懐手してあくびを噛み殺している。目元や鼻のまわりに中年疲れの浮いたその顔の、顎が馬のように長い。

美声の主は別にいた。彼に並んで、十三、四歳ぐらいの男の子が立っており、両手を合わせて拝んでいるのだ。ひと目で町場の子供とわかる身なりだが、こざっぱりした着物と鬘の結びよう

は、しもたや暮らしの子ではないことを示している。

「あらまー」と、お徳が声をあげた。「河合屋さんの弓之助ちゃんじゃないか」

「おはようございます、お徳さん」

男の子は白い歯をこぼしてにっこり笑い、おさんとおもんにも挨拶をした。

「立派な首念珠ですね。重いでしょう」

明るく話しかけられて、おさんとおもんは途端にほぐれた。あら弓之助ちゃん、などどくねくねする。

馬面の同心は、とうとう我慢しきれなくなって大あくびをひとつ放つと、お徳を起点にぐるりを見回し、間延びした声を出した。

「朝っぱらからこんな大勢集まって道端で念仏講とは、信心深くて結構なことだ」

「旦那つては、違いますよ」

きりりと言いつ返すお徳を後目に、同心はおさんとおもんに笑いかけた。

「勇ましいねえ。曾我兄弟かい？」

おもんがはにかんで頬を染め、頭の白鉢巻きに手をやった。

「旦那、おからかいになっちゃいけません」

依然、腰が引けたままの幸兵衛が口先を尖らせる。同心はひよいと手を伸ばし、老差配人の持つていた瓶を取り上げた。ちゃふん、と酒が跳ねて音をたてる。

「ああ、こいつはお浄めか。念のいったことだ」

そして初めて、面白がっているような目つきで、足元のあるものを見た。

一見、ただの地べたである。よくよく見ると、橋の板目と地べたの境目からちよつとこちら側に、色合いが違っている部分があるのがわかる。その色合いの違う部分を目で追ってゆくと、形が見えてくる。

人の形だ。少しだけ身をよじり、右手を上には伸ばし、左肘を曲げて今にも起き上がりとしていような格好だ。肘の曲がり方と、投げ出されたようになっていよう足の角度から、俯せになつていただろうことまで見て取れる。

もちろん、そこには誰もいない。からからに乾いた地べたに、このような形の染みができていくだけだ。三日前の朝まだき、ここに転がっていた亡骸から染み出た血と脂が、未だ消えずに残っているのであつた。

「執念深えなあ」

長い顎を撫で撫で、同心・井筒平四郎はそう言った。

「亡骸が番屋に移されたあと、すぐ掃除したんだよ」

平四郎はお徳の店にいた。勝手知つたる馴染みの店だ。平四郎は手近の空樽に腰を据え、お徳は火を入れたばかりの大鍋の前に立っている。ここに帰ってきて道具を片付け、鉢巻きも外し、やっと人心地ついたようなおさんとおもんは、小上がりの座敷でへたりこんでおり、弓之助に勞つてもらっている。

「だけどさ、亡骸が失くなつても、あの形の染みが消えないんだよ。まあ一日ぐらいはしょうがないだろうって思つてただけけど、明るる日になつてもまだくつきりしてるんで、もういっぺん

掃除して、土を掻いて均して、お塩をまいて——」

が、それでも人像は消えなかつた。

「で、とうとう念仏講か」平四郎は呑気に笑つて言った。「そこまでやるなら、坊主も都合すりやよかつたんだ」

「頼んだけど、来てくれないんだ」お徳の目尻が吊り上がった。「何だかんだもつたいつけてさ。お寺さんもあんなつちやおしまいだね。仏様より黄金さまなんだから」

幸兵衛長屋でお菜屋を営むこのお徳と、井筒平四郎は長い付き合いである。お徳が今よりもずっと小さな店で、大鍋ひとつの煮売屋をしていたころから、市中見廻りのついでに立ち寄つては煮物をつまみ食いするのが平四郎の日々の楽しみであつた。心やすいといえ、二十数年も昔に家督を継いだとき嫁に迎え、今も飽きずに添っている細君よりも、お徳の方が上かもしれぬ。

歳はお徳が少し上で、謙遜でも何でもなく、世間知もお徳の方が多く持っている。本所深川方の定町廻り同心には見えないものも、町の煮売屋のおばさんにはよく見える。だから、お徳の説教には文字通りの徳があり、お徳のやることには実がある。お徳が何か言い出せば、幸兵衛長屋の住人たちだけでなく、近所の者たちもみんなそれに従い、ついて来る。

しかし、今朝のあの念仏講ばかりは、さすがに勝手が違つたらしい。お徳が「もういっぺん、みんなて手を合せてお浄めをしようよ」と言い出しても、手伝うという者はいなかつた。ついできたのはこの店の女中、おさんとおもんの二人だけだ。とはいえ、この二人の娘だつて、もとはお徳の商売敵の女の手下だつたのを、よんどころない事情でお徳が世話することになり、やつと一年足らずが経つたところである。よくここまでの忠義を育てたものだ。

「それにしても、薄気味悪いことでございますね」

いつの間にかちゃっかりとおむすびを馳走になりながら、弓之助がもぐもぐ言った。

「あの人像、どうして消えないのございましょうか」

「その握り飯は何だ、弓之助」

「ああ、あの子らの朝ご飯だよ。お浄めが済まないうちは何にも食べられないなんて言うから、作っておいたんだ」

おさんとおもんはまだ飯が喉を通らないらしく、くたびれて萎れている。平四郎は弓之助に、握り飯を皿ごと持ってこさせた。

「旦那、ほかにああいうのを見たことあるかい？」

問われて、平四郎は問い返した。「ああいうの」とはどういうのだ。

お徳は言いにくそうだ。「だから、ああいうのったらああいうのだよ」

「亡骸か。なら、あるよ。それもお役目のうちだからな」

「そうじゃなくって——」

「斬られて死んだ亡骸も、いくつか見たな」

「雑ぜつ返さないでくれよ」

両手を腰にあてて、お徳はむくれた。煮物の大鍋にはようやく火が回り、ぐつぐつと旨そうな湯気があがり始める。

「あんなふうには、亡骸を取り片付けても痕が残っちゃまうってことかい？」

うん、とお徳はうなずいた。おさんとおもんも、興味をひかれたのか乗り出すようにしてこち

らを見ている。

「ちよつと覚えがねえな」

おでこに訊いてみるかと、弓之助に話を振った。初めて出会うほとんどすべての人を驚かし、いい加減見慣れたはずの平四郎でさえ未だにどきりとするほどあるほどの度外れた美形のこの少年は、指にくつついた飯粒を丁寧に食べ取りながら、

「さつそく後で聞きに行ってみます」という。

おでこというのは、平四郎が頼りにしている本所の岡っ引き・政五郎の一手下である。本当の名は三太郎といい、弓之助と同一歳で、見かけはまだまだ頼りないが、生真面目で働きの良い子である。

だから、もしも平四郎が面と向かって「おまえこそ政五郎のいちばん弟子だ」みたいなことを言ったら、おでこは、あだ名の由来である広々とした額を真っ赤に染めて恐れ入ることだろう。が、事実は確かにそうで、これまで三太郎の特技が多くの局面で平四郎たちを助けてくれた。どんな事柄でも一度聞けば覚えてしまい、いつでも自在に思い出すことができるという、便利なことこの上ない希な特技だ。

そんなおでこであれば、三十年前だか五十年前だか、江戸のどこかで人死にがあつて、その亡骸の血脂が畳や床板や地面に染みついて、どうしてもどうしても消えなかった——という逸話を知っているかもしれない。ひよつとするとそういう話が、ひとつやふたつではおさまらぬかもしれない。

「まあ、今日あれだけ丁寧に浄めておいたんだ。もう大丈夫だろう。そんな顔をしなさんなよ」

平四郎はおさんとおもんに言い聞かせながら、彼女たちの朝飯である握り飯を食ってしまった。お徳たちは、あの人像に塩をまき、手を合わせて念仏を唱えたあと、水をまいて地面を柔らかくしておいてから、熊手でぎくぎくと掘り、人像の部分をすっかり取り去った。掘った土は桶に移して川まで運び、再び合掌して念仏を唱えながら水に流す。すべて流してしまつたら、掘った地面を平らに均し、そこに塩と酒をまいて、また長々と念仏だ。未だ何処の誰かもわからぬあの亡骸に対しては、親切過ぎるほどの供養であろう。

「あの人、やつぱり辻斬りに斬られたんだらうよね？」お徳が、気の毒そうに声を落として尋ねた。「ひどい傷だつたよ……」

亡骸は男で、歳は四十路をいくつか出たぐらいたつたろうか。見つけられたときにはすでに身体のおちこちが固くなりかけていた。断末魔の形相は凄まじく、両目は今にも飛び出しそうなほどに見開かれ、口元は歪んで、声のない悲鳴をあげたまま開けっ放しになっていた。さらに、それよりもっともつと大きな口が、背中にざっくり開いていた。

右肩から左腰の下まで、真っ直ぐに斬りおろされていた。一刀両断、いわゆる袈裟がけである。剣術の心得のある者の仕業であることに疑いはない。得物も刀でまず間違いないだろう。

斬り殺された男の懐からは、持ち物がすっかり抜き取られていた。財布はもとより、漬紙さえなかったのだ。となるともう決まりだ、これは辻斬り、食い詰め浪人が金欲しさに凶刃をふるったのだらう——

大方が納得する推測である。が、平四郎はそう断じるのに、少しばかりためらいを感じている。男の身なりは貧相だつた。着物は、表こそ直しが目立たないが、胴裏や裾回しは繕い跡だらけ

で、色も柄もとりどりになっていた。帯はぺらぺらで、夏の陽にかざせば向こうが透けて見えるよう。履き物は汚れ放題で、男の足の裏も同じくらい汚れていた。履いていてもいなくても変わらないほどだつたのだ。

しかも、男はひどく痩せていた。あばらが飛び出し、喉仏には蠟燭が立てられそうな有様だ。食いしん坊の平四郎は、男のべつたんこの腹を見て、この前食い物らしい食い物がちゃんどこにおさまったのはいつだろう？ と訝るより先に、背中が寒くなった。

職人には見えず、お店者でもない。遊び人というには貧乏くさすぎる。要するに正体不明だ。ただ、まだ身体に命が入っていて、立ったり歩いたりしているうちから、この男が病人さながらで、食べるに窮してよれよれしていることは、誰の目にも一目瞭然だつたらうと思える。

辻斬りが、そんな男を狙うだらうか。

亡骸が発見されたのは夜明け前、東の空が明るんで、早起きのお天道様が顔を出しかけた頃合이었다。見つけたのはそのお天道様よりもまだ早起きの貝拾いの子供だったが、見上げた肝っ玉を持つこの子は、倒れ伏している男にもしやまだ息が残っているのではないかと、声をかけて首筋に触れてみたそうだ。そのとき既に亡骸は冷たく、首は硬く凝っていた。してみると、斬り殺されたのは遅くても真夜中を過ぎたころだろう。

辻斬りが、夜の暗さに獲物を見間違ふということならありそうだ。が、それだって、刀の届く間合いにまで近づけば、相手が大黒様と貧乏神のどちらに縁が深そうかということぐらいわかりそうなものである。

いんやそれでも、びた錢でもいいから欲しいと思つうほど、辻斬りもまた窮していたという場合

もあるじゃないか。その意見には、平四郎はまた首をかしげる。それにしては、殺しに使われた得物の刀が切れず、ぎてい。

刀は武士の魂だ。飯は食わずとも刀の手入れだけは怠らぬ。確かに、ひと昔——いやふた昔前までは、そういうもの、ふがこの江戸の町にも暮らしていた——かもしれぬ。が、昨今は事情が違ふ。食い詰め浪人がまず真つ先にやることは、刀を質に置くことだ。後生大事に武士の魂を守つて手入れしていたところで、仕官の道などどこにもない。劍筋を鈍らせぬよう鍛練を続けるだけなら、竹光で充分に事足りる。

辻斬りを思い立ち、刀を質から請け出したのではないか。いや、それも考えにくい。請け出す金をどう都合するのだ。それくらいなら、道具屋で安い刀をとりあえず買入れれば済むことだ。「辻斬り」とはいえど、いよいよ本当に獲物を斬らねばならぬ事態になるよりは、ぎろりと光る刃を見せて、「懐中ものを置いてゆけ」とひと脅し、それで用が足りるなら、余計な手間をかけたくはないだろう。いよいよ刀にものを言わせなくてはならなくなつても、斬れ味なんぞは二の次だ。

というようなことをつらつらと、実は平四郎が考えたのではない。すべて弓之助の頭のなかから出てきたことだ。お徳の店のすぐそばで、男がぼつさり斬り殺された。検視のお調べがあつて、詳しくはこれこれこんな様子だ——と平四郎が語つて聞かせるそばから、人形のような整つた顔を引き締めて、弓之助はこれらのことを次々と口にしたのである。

そしてしめくくりにこう言つた。  
——名刀の試し斬りではございませんかね、叔父上。

いかももしれねえ、とは平四郎も思う。大方の武家が「食わねど高楊枝」のつましい暮らしをしていゝる今の世の中で、名刀を愛でる金と暇と地位を持ち合わせ、なおかつそれを自在に使うこともできるが、試し斬りに手頃な胴だけは、闇に紛れて市中をうろつき、自前で調達せねばならぬという侍がいるならば。

——いるかなあ。  
いるかもしれねえが、えらい手間だ。よろず面倒くさいことが嫌いな平四郎はそう思わずにいられない。

ともかく、何となく平仄の合わないことがまつわりついているのがあの亡骸なのである。  
「でも井筒様、今朝はどうしてこんな早くからいらしたんですか」

お徳に鍛えられ、一丁前に丁寧な口をきけるようになったおさんが、ようよう顔色を取り戻してきて尋ねた。

「決まつてるじゃねえか。おまえらが揃つて念仏講をやるというから、見物に来たんだ」

おさんとおもんばかりか、お徳もこれには「え？」と言つた。  
「何で知つてたのさ」

「評判になつてるんだよ。南辻橋たもとの呪いの人像つてな」  
呪いと聞いて、また娘たちが騒ぎ出した。うるさいね、とお徳が一喝する。

「大丈夫でございますよ、おさんさん、おもんさん」  
弓之助がすかさず宥める。ついでに、可愛らしく握り飯のげつぷをした。

「あの亡骸は、それはもちろん下手人を恨んでいることでございますよ。でも、この『おとく

「屋」の皆さんには、有り難いと感謝こそすれ、恨みも祟りも抱きようがございません」  
女の（細くない）細腕に鍋ひとつの煮売屋を生業としてきたお徳は、おさんとおもんを引き取ったことをきっかけに、今のようなお菜屋を始めた。店売りが主な商いだが、頼まれれば仕出しも受ける。

煮売屋のうちはお徳の顔と名前が看板でよかつたが、こういう店を構えたからには屋号が要る。早く付けろとせつついても、何が照れくさいのかお徳はその気にならず、そのうち、平四郎たちがとりあえず「おとく屋」と呼んでいたのをそのまま使うようになってしまった。

「今日のお浄めで消えてくれるかしら」

おさんが、黒子のひとつを指で触りながら呟いた。

「なあに、消えなかつたらもつと評判になって、瓦版屋がやって来る。大勢集まりや、なかにはそそっかしいのもいてさ、うっかり人像を踏み消されちまうだろうよ。誰かが踏めばつられて別の誰かが踏んで、そうこうしてるうちに踏み消されちまうだろうよ。今のうちが見納めだぜ」

旦那つてば、またいい加減なことばっかり言つてさ。お徳が怒り顔で吹き出した。

理由はどうあれ、無惨にも斬り殺された死骸がひとつ出ている。大親分の茂七からこの本所深川の仕切りを受け継いだ政五郎親分は、平四郎のようにのんびりはしてられない。弓之助を連れて本所元町の政五郎の家を訪ねると、女房のお紺の切り回す蕎麦屋で、宿六はいいにく、今朝起き抜けに出たつきりでございますという口上を聞くことになった。

「間島殿が張り切っているんだらう」

本所深川方定町廻り同心、間島信之輔。十七歳で父の跡を継ぎ、この年明けに見習いから昇格したばかりの若い朋輩である。

「政五郎は、正式に間島殿から手札を受けるようになったんだらう？」

お紺は、ちよつと気を兼ねたような目つきになって、うなずいた。「はい。井筒様には申し訳ない次第なんでございますけど……」

平四郎は笑った。「俺は政五郎にとつても臨時廻りだ。今までと何が変わるわけじゃねえ。間島殿は真面目な出来物だしな」

三十俵二人扶持の町方同心の身分は、本来は世襲されるものではない。が、実際には代々倅もしくは婿が親父殿の跡を継ぐことになっている。平四郎も（四男ではあるが）そうだった。間島信之輔も同様である。

さて、平四郎の親父殿というのはいろいろとだらしないところのあった男だが、たったひとつ、えらく潔癖な部分があった。岡っ引きを嫌っていたのである。

岡っ引きまたは目明かしと呼ばれる者たちは、役人でもなんでもない。町奉行所の与力や同心が、自分の裁量で抱えて働かせるだけの使いっ走りである。また、市中の探索事をさせるには、薄暗いところにも真つ暗なところにも通じている連中を使う方が便利なわけで、自然、彼らの中には後ろ暗い過去を持つ者たちが混じってくる。なかには性根の曲がった者だつていて、「お上の御用だ」という台詞を楯に、弱い者いじめをしたり、強請たかりをやらかしたりもする。そういう弊害が目に見えるので、過去には、幕府が「岡っ引き・目明かしの禁止令」を出したことさえあるくらいだ。もつとも、彼らの働きなしには立ちゆかないことがすぐに判つて、なしく

ずに元に戻ってしまっただが。

平四郎の親父殿は、この幻の禁令を金科玉条に掲げていたのである。だから平四郎は、親父殿の跡を継いだとき、手足のように使える岡っ引きを一人も持たなかった。それで何ら困ったこともなかった。めざましい働きをしようという気がない怠け者だから、日々のお役目には中間の小平次がいれば用が足りていたのだ。ずっとそうして過ごしてきた。が、もう二年ほど前になるか、ちよつとしたことから政五郎と縁ができた。政五郎の人柄に惹かれて親しくもなつた。

一般に岡っ引きたちは、特定の与力や同心の下で働き、その名前を彼らの仕事の抛り所にしてゐる。それを「手札を受ける」と表現する。昔は本当に、札のようなものを書いて渡して貰いたいのだが、今ではそこまで具体的なことはしないようだ。

平四郎と縁ができたとき、政五郎にはすでに手札を受けている役人がいた。「役人」という曖昧な言い方をするのは、政五郎の場合、どうもその人物が一人ではないらしく、また町奉行所に者に限らないようだったからである。直に本人から聞いた話ではないし、問い質してみたこともない。ただ何とはなしに、付き合ひのなかでそう察するところがあつた。政五郎を鍛え上げた大親分の茂七は、「回向院の茂七」といえば泣く子も黙るといふほどの顔役だったから、政五郎が彼の地場を引き継いだとき、お上との太い絆も一緒に引き継いだということは充分あり得るし、それについては半端役人の平四郎が詮索する権利などない。だからこれまで平四郎は、実のところ政五郎が誰に雇われているのか、正確なところを知らなかつた。それが今般、はつきりしたのである。

「間島信之輔様から手札をお受けすることになりました」と、本人が平四郎に告げたのだ。ふた月ほど前のことである。

「私は間島様にはたいそうお世話になつて参りましたから、ご恩返し of 気持ちを含めて、信之輔様のためにも忠勤に努めたいと思つております」

この口上を述べるとき、政五郎はまったく悪びれていなかった。誰から手札を受けようが、井筒様と私の間柄は、これまでと一切変わりはありませんのですからかまいませんと、言葉ではなく顔つきで言つていた。無論、平四郎もそのつもりだったから、

「おお、励んでくれや」と軽く受けた。

と、政五郎は大商人のような風格のある笑顔で、

「信之輔様は、一度井筒の旦那にお会いしたいとおっしゃっています」と言つた。

「俺に何か用か」

「お父上から、井筒殿というのはなかなか味のある人物だから、願つて昵懇にしてみらえと耳打ちされていたようです」

平四郎は素朴に驚いた。

町奉行所の同心には多種多様の役割と役柄がある。平四郎自身もいくつかのお役についた後に、今は本所深川方臨時廻りを拝命しているのだ。間島の親父殿とはどこかですれ違つているのかもしれないが、面識はない。ふらふらと市中に出るような役職ではなかつたかもしれない。

「変わった親父殿だな。町方役人たるもの、このようになってはならぬという悪い見本を見せるつもりなのかもしれないな」

いえいえ——と、政五郎は笑っていた。

という次第で、間島信之輔とは、それから間もなく、政五郎とお紺のこの店で顔を合わせた。その日組屋敷の自分の家に帰って、平四郎は細君にこう言った。

「青雲の志というものを感じさせる若者だったぞ」

「どんなところがでございますか」と、細君は問うた。

「なにしろ月代さかやきがつるつるのすべすべだ。男でも、若いうちはやっぱり肌がきれいだな」

あなたのおっしやることはわけがわかりませんと、細君は呆あきれた。しかしすぐ立ち直る。

「いずれ弓之助があなたの跡を継いだ折には、もっとつるつるのすべすべでございますわ」

張り合うつもりでいるらしい。余計なことを言うのはよそうと、平四郎は話題をそらして問いかけた。

「やっぱり弓之助を養子に欲しいか？」

「欲しいも何も」細君は目をぱちぱちさせた。「もう、そういうことだとわたくしは思っておりません。違うのですか？」

平四郎と細君のあいだには子がない。いずれは跡目を外から迎え入れねばならぬ。弓之助は細君の姉の子で、佐賀町の藍玉問屋河合屋の五男である。細君は弓之助を跡継ぎにしたいと熱望している。

平四郎も半分以上はその気だ。弓之助はべらぼうな美形だが、それ以上に頭が切れる。これまでも、この子を連れ歩いて教えられたこと、助かったことは数多い。それに何より、一緒にいて面白い。

ただ、町場育ちの子が八丁堀に入って、本当に幸せだろうか——ということも思う。町方役人になれば、商人とは違う角度で、浮き世の汚濁おぼだを眺めなくてはならなくなる。現に、井筒家に入りするようになってから今までのあいだに、大きな出来事だけでもふたつ、弓之助はそれで辛い思いをしてきた。うんと辛かったろう。どちらの事件も事実上、弓之助が解き明かしたようなものだった。

当の本人は、そんなことなど忘れたような顔をして、今も平四郎の横で旨そうに卵とじを食べている。見慣れたつもりでも、どうかするとやっぱり驚かされるほど美しいその顔に、近頃はときどき、たくましさでもいうべき強い線が浮かぶようになってきた。まだ片鱗へんりんに過ぎないが、この線はどんどん太くなってゆくのだろう。弓之助は成長している。一方で平四郎は老いてゆく。話を決めるなら早い方がいい。それでも、平四郎はまだ腹を決めかねている。

「ま、おいおい決めるさ」と言って、そのときも逃げてしまった。

ともあれ、そのつるつるのすべすべの間島信之輔は熱意あつに溢れた新任の定町廻り同心である。町方役人としての矜持きんぢはあるが、だからといってそっくり返っていないところもい。親父殿を通して政五郎の働きぶりをよく知っているのだろう。「これからは俺が貴様を使うのだ」という見おろしの目つきではなく、敬愛と表してもいいような態度をとっており、かえって政五郎が恐縮おそくしていた。

「政五郎に任せておけば、おっつけあの亡骸の身元も割れるだろうし」

「ええ、人相書きを配って、いろいろ調べ回ってはいるようなんですが……」

お紺は軽く首をひねる。

「何ですか手強いようですよ。斬り殺されたあの男は、一人暮らしたんでしょか。誰も案じていないんでしょかね」

「お江戸は人の吹き溜まりだ。いろんな奴がいるからな」

「おうちの方が気づいてないのかもしれないよね」

卵とじを食べ終えて、ごちそうさまでしたと手を合わせてから、弓之助が言った。

「何日か家を空けることが珍しくない生業の人だったのかもしれない」

「あの貧相な身なりですか？」

平四郎はぶっかけをすすり上げながら問い返した。弓之助はうくと唸る。

「そういえば、おでこさんは政五郎さんのお手伝いでお出かけですか？」

弓之助が政五郎を「親分」と呼ぶと、政五郎は照れる。政五郎が弓之助を「坊ちゃん」と呼ぶと、弓之助が照れる。なので、互いにさん付けで呼び合うという協定ができています。

「いえ、ちよつと近所にお使いに出ただけでございますよ。もう戻るころでしょう」

噂をすれば影で、ほどなくおでこが帰ってきた。大笹いっばいの野菜を抱えている。八百屋に行ってきたらしい。ほかの手下にはない特技を持ち合わせていても、それに倣うことなく、こうした下働きにも手を抜かないところが健気である。

「あ、弓之助ちゃん」

おでこがぼつと顔を明るくした。井筒様こんにちはと、ぺこりと頭を下げる。

「おう、邪魔してるぞ」

「はい、おいでなさいまし」

と、おでこはその場に立ったまま、広い額にしわを寄せ、目と鼻と口をきゅつと顔の真ん中に集めて、ひと呼吸。そして言った。

「人死にのあつた家や土地で、血脂の痕が永いこと消えなかったというお話でしたら、あたいが大親分から伺った分が三つ、ほかから聞き集めた分がふたつございます。どれから取りかかりましょうか」

平四郎は大いに喜んだ。「どれでもいい。順番にやつつけてくれ」

おでこは次々と過去の「人像」出現の逸話を語った。弓之助も心得たもので、すかさず矢立と小さな帳面を取り出し、話の要所を書き留めてゆく。おでこの特技は見事なものだが、覚えた話を語っているだけなので、途中で遮られると最初からやり直さねばならなくなるという弱点があった。それを補佐するために、この前に大きな事件に関わったときから、弓之助が彼の話を書き留めて記録を作る係を引き受けた。全部を書くことはできないが、要点を押さえておけば、次におでこが思い出そうとしたとき、それが目次としてとっかかりになる。

五つの実例のどの場合でも、人死にの後に残った血脂の人像は、まわりの人びとを大いに悩ませ、怯えさせたという。ただし、そのせいで何か災いがあったという例はない。

「皆さん、人像を手厚く供養して、それがようよう消えてしまうまでは、粗末にしないように心がけていたそうでございます」

そのうち踏み消されてしまうだろうなどという不屈きなことは、平四郎ぐらしか考えないものである。

弓之助が書き留めたものを検めながら呟いた。「この通油町の件の、座敷に人像が残って、

畳を替えてもまた同じような人像が浮かび上がってきたというのは、どういう理屈なのでしょうか」

「三度まで畳替えをして、ようやくやんだというのだから念がいつている。

「嫌ですねえ。死人の思いが凝<sup>こも</sup>っていたんでしょか」

「お紺は薄寒そうに首を縮めるが、言い出した弓之助はしゃらっとしている。

「畳の下の床板まで、油脂が通っていたのかもしれないですね。それが新しい畳にも染みこんでしまう——」

「あたいは語<sup>かた</sup>んじるだけで、考えるのは弓之助ちゃんの仕事ですという顔で、おでこは麦湯を飲んでる。弓之助も一人でぶつぶつ呟<sup>つぶや</sup>き続ける。

「これは事が起こったときの陽気にも関係があるのかもしれないですね。どれも春や夏のことです。冬場には油脂が早く固まってしまふからですね」

「しかし、三度畳を替えてもしみ通るほど、人の身体には油脂があるもんかい？」

「平四郎の問いに、弓之助はすかさず答えた。

「わたくしたちの身体は、七割方水気でできているのだそうでございますよ」

「誰に聞いたんだ、そんなこと」

「幸庵<sup>こうあん</sup>先生に教えていただきました」

「平四郎の持病のぎっくり腰を診てくれる町医者である。もういい歳の爺さまだが、腕前と胆力はまったく衰<sup>おとろ</sup>えていない。

「おまえ、いつ先生に弟子入りしたんだ？」

「弟子ではありません。折々に通って、興味深いお話を伺<sup>き</sup>っているだけです。おでこさんの聞き覚えに書き足しておく、あとあとの役に立つ知識がございますので」

「こういうのを聞くと、平四郎の細君はきつと喜ぶだろう。ほらあなた、弓之助はもう町方役人になり、江戸市中を守るお役目につく所存なのでございますよ。しかし平四郎は逆に思う。こいつは医者や学者になった方が、世の中のためになるんじゃないかねえか。」

「井筒様と弓之助ちゃんは、南辻橋の人像のお浄めをなすったんですってよ」

「お紺がおでこに言った。おでこは今さらのように驚いた顔になる。

「あたいもお手伝いに行けばよかった」

「なに、俺も弓之助も見物してただけだ。お浄めをしたのはお徳だよ。おさんとおもんに手伝わせてな。見物<sup>みもの</sup>だったぞ。おさんとおもんは白鉢巻<sup>かたき</sup>きだ。親の仇<sup>かたき</sup>をいざ討<sup>う</sup>たん、てな具合に、まなじり決して熊手を構えてな」

「二人の娘の名を聞いて、おでこのくりくり眼<sup>まなこ</sup>がふつと焦点を失った。一瞬だが、平四郎は確かにそれを見てとった。

「ああ、大変でございましたね」

「すぐ気を取り直し、殊勝なおでこに戻る。

「まずまず、助太刀<sup>すけだち</sup>に伺<sup>うかが</sup>うべきでございました。あいすみませんでございます」

「あたいはおつむりの勾配<sup>こうばい</sup>がゆるくて至りません——と小さくなる。気が利かない、と言っているのだ。

「人像の評判は親分から聞いておりましたから、先に気がつくべきでございました」

「政五郎も、幸兵衛長屋の近所のことなら、お徳に任せておいて大丈夫だと思っただろう。おまえが気に病むことじゃねえ」

ところで三太郎——と、ここでお紺が微笑みながら口を入れた。

「あんた、もう『あたい』はやめたんじゃなかったっけね。これからは『手前』と言うんだよね？」

あつと声をあげて、おでこは両手で口を押さえた。

「さいでした。おかみさん、もつと早くに言ってください」

平四郎は笑い、弓之助もニコニコしている。

「そうそう、取り決めたんでしたね」

「おまえはどうするんだ」

「わたくしは『わたくし』です。それとも、変えた方がよろしいでしょうか」

おでこが、それだところながらりますと困ったように言った。

「そうだな。当分は『わたくし』と『手前』の組み合わせで精進することだ。いい釣り合いだよ」

「はい、わたくしもそう思います」

弓之助が呼びかけて、おでこ二人、過去の辻斬りや切り取り強盗の案件を洗い出してみることになった。辻斬りが病人や、行き倒れに近いような獲物を狙った例はあるか。そうした荒事に使われる得物の斬れ味から、下手人に通じる手がかりが見つかつたことはあるか。

「河合屋には、小平次をやっておまえがここにすることを伝えておく」

「はい、ありがとうございます、叔父上」

小平次は井筒家の中間である。平四郎が親父殿の後を継いだように、小平次も父子二代で仕えている。弓之助の登場で、自分の立場が脅かされるのではないかと一時はひどく警戒していたが、万事に遺漏のないように見える弓之助に、おねしょという子供らしい弱味があることを知つてから、ぐつと風向きが変わつた。弓之助の邪気のないふるまいにも心が緩んだらしい。このごろでは、平四郎が弓之助を連れて出歩くのに、嫌な顔をしなくなった。それどころか細君の味方になり、早く養子縁組の話をもとめて願い書きのお届けをするべきです、などとせつづく。

握り飯と蕎麦で腹はふくれたし、さてこれからどうするか。本所元町を出るまでは、あてもなくぶらぶらと平四郎は歩いた。ほつつき歩いているうちに、間島殿か政五郎か、彼の手下に出くわすかもしれない——

それにしても暑いや、などと日差しに目を細めていたら、誰かに声をかけられた。

「井筒様、井筒様」

振り返ると、堀割沿いの柳の木の下で、木箱を下げた浅次郎がお辞儀をしている。八丁堀出入りの髪結いで、平四郎は今朝も彼に小銀杏を整えてもらった。

「おう、なんだ出髪かい」

木箱は髪結いの道具箱である。浅次郎のそれには、横つ腹のところの手に込んだ彫刻がほどこされている。「宝舟くし」の柄だ。打ち出の小槌、宝船、福助に招き猫に扇子。

「いいえ、これから南辻橋へ行くところでございますよ」

浅次郎は抜けるような色白で、立ち居振る舞いもなよなよと女っぽい。身体つきはむしろがっちりしている方なのだが、それはあらためてしげしげと見ないと気づかない。人の雰囲気という

ものは、動いているときに醸し出されるものだからだ。

「評判の人像を、ひと目見ようと思ひまして」

実は人像の供養のことは、今朝、浅次郎から教えてもらったのだ。髪結いは早耳で、世俗のことに通じている。町方役人には貴重な人材だ。

「なんだ、話だけ聞いてて、実物は見ていなかったのか」

「はい、何だか恐ろしゅうございますし」

持ち前の声は野太い男のそれはずなのに、しゃべり方ではんなりと聞こえる。八丁堀には彼のこの氣質を嫌う者もいるが、平四郎はまったく平気だ。浅次郎の方も、彼を嫌な目で見る向きには頓着せず、組屋敷のお得意をしななとまわり歩いて商売に励んでいる。

「それでも、辻斬りの難にあつたお方は、よっぽど念の強いお人だつたんでしようねえ。むしろ怖がるより仰いだ方がいかもしれません。そういうお人は神様に通じます」

道端の立ち話だから、平四郎は少し声を潜めた。

「辻斬りつて言つたな」

「はい、申しました」

「本当にそうだと思うかい？ 今朝方の八丁堀じゃ、そういう風向きだつたかね」

要するに、ほかの与力や同心たちはこの件をどう見ているのか知りたいという問いだ。今朝は人像供養の話ばかりで、そのところを聞き漏らしたことを、浅次郎の顔を見て思い出した。こういう後手後手が、平四郎には多い。多いが、後で思い出せば差し支えはないと思うところがまた平四郎らしい。

浅次郎の切れ長の目が、ひらりとまばたきをした。すいと動いて平四郎の耳元に顔を寄せる。

「手前が小耳に挟んだ限りでは、このことを深く気に留めているお方は少ないようでございます」

「派手な殺しだがな」

「斬られたお人が、どこぞの馬の骨でございますから」

無情なことを、つややかな口調で言う。

「これがせて小金持ちの商人や、真面目な職人でもございましたらね」

「うん」と、平四郎もうなずかざるを得ない。

「やさぐれ者同士の喧嘩沙汰の挙げ句の殺しじゃないかと、あつさりおっしゃる方もおられます」

「それだと得物が違う。刀だぞ」

「近頃では、刀を使うのはお武家様に限りません。嘆かわしいことではございますけど」

確かに、商人の子が道場に通つてやつとつを習うのも、ずいぶん前から珍しいことでなくなつた。ただ、浅次郎が言っていることの意味は少し異なる。刀が侍の魂として、格別の存在だった時代はもう過ぎてしまったということだ。

「やさぐれ者、か」顎を撫でながら、平四郎は呟いた。「身を持ち崩して食うにも困つた遊び人の末路——か」

浅次郎はしおらしく首を傾けてうなずいた。政五郎の女房のお紺も佳い女で、小首をかしげたりすると色っぽいが、こいつには負ける。

「とりあえず、手前なんぞの仕事先では、南辻橋たもとの辻斬りは恐ろしくうございませぬえと話題にしております。それで何か珍しい話を聞き込みましたら、すぐ旦那に申し上げます」頼むよと平四郎が言うと、浅次郎は花が開くような笑顔になった。

「ねえ旦那、いつぱんお会いしたきりでございませすけど、手前には忘れられません。あの可愛らしいお顔の甥御さんは、お元気でいらっしやいますか」

弓之助のことである。浅次郎はその美形を見て、弓之助が井筒家の跡継ぎになったならばぜひ手前に小銀杏を結わせてくださいましと、熱いため息をついたものだ。

今も熱い。それでも暑いのに、浅次郎の息が燃えている。平四郎は一步退いた。

「達者にしてるよ。背も伸びたしな」

「まあ、嬉しい！」

何が嬉しい。

「くれぐれもよろしくお伝えくださいませ。手前はあれから、あの坊ちゃんの夢をたびたび見っております」

平四郎が退いた分の距離をくねりとすり寄り直すと、囁いた。

「今朝は奥様がいらしたので、こんなことは申し上げられませんでした」

ああ恥ずかしい、ごめんくださいませねと、小走りに行つてしまった。平四郎は手の甲で額の汗を拭いた。

細君は、弓之助の美形は下手をすると自身の身を誤らせるだけでなく、他人の身をも滅ぼすものだと言う。いくら何でもそれは大げさだと笑つてきたが、今ここに、夢に見るほど弓之助に魅

せられている男が確実に一人はいるとわかった。しかも、たびたびの夢だ。

浅次郎の夢のなかに出てきた弓之助は、いったい何をしていたのだろう。余計なことを考えて、また汗が出る。血脂の人像の呪いなんぞより、そつちの方がよっぽど剣呑ではなかるうか。

というくらいに、今はほんくらを決め込んでいる井筒平四郎である。

## 二

南辻橋たもとの人像は、それから間もなく消え失せた。

あの決死の覚悟を目の当たりにした者としては、お徳たちのお浄めが利いたのだ——と言つてやりたいところだが、あれからなな一日おいて降つた大雨が洗い流してくれたというのが真実のところである。江戸の町の夏場には、ほとんど毎夕のように夕立が見舞うものだが、今夏はどういうわけかそれが間遠で、橋のたもとにあの亡骸が転がされた以前には、もう十日余りただの一滴も降つていなかった。地はからからに乾いていた。血脂が染みこんで固まつてしまったのも、大方そこらへんに原因があつたのだろう。

その大雨は夕立とも呼べず、午前から降り出して、一刻以上も続いたものだ。ときどき雨脚が鈍つたかと思うと、また勢いを盛り返す。降り出したころには、地べたにも家々の屋根にも扉の上にも、大粒の雨が落ちるたびに埃が立つたが、やがてはそれに代わつて水しぶきがあがるようになった。路地裏には早瀬のように音をたてて雨水が流れ、どぶが溢れて泥水は子供らのくるぶしを超え、すぐに足首まで洗うようになった。

町中の通りから人影が消えた。かわりに、軒先のきさきという軒先、庇ひさしという庇に雨宿りの人びとが溜まり、互いに爪先立つようにして狭い場所に居並んでいる。蕎麦屋や居酒屋、一膳飯屋には客が溢れた。行商人や振り売りの商人たちは、ぎゅうぎゅう詰めの人びとに気を兼ねて、大事な商品だけを庇の下にかばい入れ、自分は雨のただ中に出てずぶ濡れになっている。

岡っ引きの政五郎は、浅草今戸町いまたまの一角で、この激しい通り雨にたくわした。この町の小さな料理屋から、未だ身元のわからぬ南辻橋たもとで殺された男について、少しは脈のありそうな話が舞い込んだので、足を運んできていたのだ。

が、訪ねてみれば空足からあしだった。半年ほど前、ここで下働きをしていた三十過ぎの男が、胸を病んだらしいというのでやむなく暇を出したところ、主人夫婦を脅すような恨み言を並べて姿を消したという申し状で、南辻橋の男の病人のような痩せように符合するものを感じたのだが、人相書きを見た主人夫婦は、顔立ちがまるで違うと一蹴したのだ。

「あれからの消息が知れないので、わたしらも気に病んでいるんです」

後生が悪くて、という主人夫婦は、実のところは後ろめたいというより、まだ、無情に放り出した下働きの男の怒りに怯えているのだろう。別人と知って腰をあげようとする政五郎をなんだかんだと引き留めて、逆恨みは消しようがないから怖いのだ、お客に迷惑がかかると困るのだ、相談とも愚痴ともつかないことをぐだぐだと言ひ募った。奥の座敷で話し込んでいたので、障子越しの明かりが急に薄れ、吹き込んでくる風が湿り気を帯びてきたことを感じてはいたものの、いざ引き上げようとなって、ようやく空を仰いで政五郎はしまったと思った。西の空からむらむらと、雨をはらんだ黒雲がもう頭のすぐ上まで攻め寄せてきている。こりゃ降ってくるな、と駆

け出した途端に、最初のぼつりが月代にあたった。と思つたら、またたく間の土砂降りである。

それでもまだ田地ではなく町筋にいたのが幸いだった。大川橋を目の前に、花川戸町はなかわどの空樽間屋の店先に飛び込んでひと息ついた。

玉井屋たまいという店である。ほかにも雨宿りの人びとがいた。店では前垂れをした奉公人たちがまめまめしく立ち働き、親切に手拭いを貸し、足元を濡らして往生している女には手頃な空樽を勧めて休ませたりしていた。

そのうちに、一人の年配の奉公人が、手拭いを使う政五郎の腰の十手に目をとめたらしい。小腰をかがめて寄ってきて、奥へどうぞと耳打ちした。ほかの雨宿りびとたちの手前があるから、政五郎もそつと声を落として、

「私あたしは本所深川あたりでお上の御用を務める政五郎と申します」  
名乗った上で、やんわりと辞退した。

「通り雨だ、すぐにやむでしょう。軒先を貸していただくだけで充分でござんすよ」

「いえいえ、どの町のお方であろうと、親分さんを軒先に立たせておくわけには参りません」

藍染めの長い前掛けで手を揉むようにしながら、老奉公人はさらに勧める。政五郎は少しばかり困った。

岡っ引きのなかには、たまたまの雨宿りぐらいでも十手をかさにきて、もてなしを要求するよいうな手合いがいる。だから、相手も余計な気をつかってしまうのだ。自分はそういう輩やからとは違うが、闇雲に断るだけでは、かえって先方の懸念が晴れない。

と思つていたら、老奉公人はさらに声を落としてこう続けた。「おかみのご挨拶申し上げたい

というのです。実は、おかみは親分のお顔に覚えがあるようでして、もしかしたら昔お世話になった方ではないかと」

「おや、と思った。政五郎には、花川戸あたりの商家のおかみの世話を焼いた記憶などない。ただ、女というのは嫁ぐものだ。昔世話になったというのなら、この店のおかみがおかみになる以前の話なのかもしれぬ。」

政五郎は頭をひとつ下げ、それではお言葉に甘えますと奥へ通った。急な雨で募った湿気のせいか、積み上げられた空樽から醤油の匂いが濃く漂う。

女中が出てきて足を濯いでくれた。泥だらけの足がきれいになって、気分もさっぱりする。老奉公人のあとに従い、帳場の脇を通ってよく磨き込まれた廊下を進むあいだ、ごく短い時ではあったが、政五郎は忙しく頭を動かして、これから対面するおかみに相当しそうな女の顔や、女の関わった面倒事を、思い浮かべていた。

それはどれも外れていた。

玉井屋のおかみでございます。三つ指をつけて頭を下げた女は、歳は三十を少し出たくらいだろうか。つと顔を上げると色白の、なかなかの美貌だった。ぱつちりと黒目がちな瞳をひたと政五郎に据えた。そして口元をほころばせた。

「ああ、やっぱり。間違いございません」

しかし政五郎には覚えがない。いったいどの誰だろう。

着物の色目は地味だが、それがかえって女の肌の白さを引き立てている。丸鬘は小さめにこんもりと結び上げ、薄青から紫色への変わり目の紫陽花の花に似た色合いの手絡をかけていた。

政五郎の当惑を見てとつたのか、おかみはさらに大きく笑み崩れ、もう一度深々と辞儀をしてみせた。

「政五郎親分でいらつしやいますね」

「はい、確かに私は政五郎ですが」

「茂七親分は今もお達者でございませうか」

政五郎は内心で眉をひそめた。大親分の茂七は、頭の働きこそ今でも達者だが、さすがに足腰は萎えた。たまに湯治に出かける以外は、ほとんど本所元町の家を出ることはない。なにしろ米寿を超えているのだ。

茂七が「回向院の親分」と呼ばれて親しまれ、頼りにされていた時代は、さてもう二十年からたつぶり昔のことである。その当時ならこの女は、やつと十かそこらではないのか。

思い出すべきは女の絡んだ事件ではなく、子供のそれだったのか。

「わたしの顔をお見忘れでしょうか。無理もないことでございますが」

先んじて、おかみは言った。

「暮らし向きが変わりまして、わたしもかなり変わりました。髪の毛の結びようや着るもので、女の見た目は違って参ります。それでもこの名にはお聞き覚えがございませんか」

後先になりましたご無礼いたしましたと丁寧に詫びて、おかみは「きえ」と名乗った。

政五郎は、思わずあつと声をあげかけた。

その名なら忘れるはずはない。心の片隅に、いつでもあった。

だがしかし、あの「きえ」はこんな美しい女ではなかったし、これほど若くもないはずだ。い

や、若くはないのか。女の正直な申し状のとおり、化粧と衣装で若々しく見えるだけなのか。

ならば——この「きえ」はあの「おきえ」か。

「もう、九年も前になりますか。兼三けいざうのことで、親分さん方にたいへんなお手間をおかけいたしました」

間違いない。兼三とは、おきえの当時の亭主の名前である。腕のいい建具職人だったが、酒乱の癖があり、そのために人を殺めた。伝馬町の牢につながれて獄死し、あとにはおきえと五人の子供たちが残された。

「あなた本当に……おきえさんか」

まだ信じかねている自分の心の波立ちを鎮めるために、政五郎はゆっくりと問いかけた。

「はい。お久しぶりでございます」

おかみの顔に笑顔の花が咲く。笑うと、目元や口元に浮かび出る細かな皺しわは、この女の本当の年齢を裏書きしていた。

九年前、事件があつたころ、おきえはすでに三十四、五だった。ならば今では四十をどうに過ぎてゐる。若々しく見えるどころか、この女は若返ってしまったのだ。

「こいつは驚いた」

ともかくも、その台詞せりふしか口をつけて出てこない。降りかかった雨を拭って湿っている手拭いを懐から引つ張り出して、政五郎はまた顔を拭かずにはいられなかった。

「女は化け物でございませよ？」

媚びるように口元を尖らせて、おきえは言った。唐紙からかみの外から声がして、さっきの女中が盆を

運んできた。女中の顔を見ても、おきえの表情は変わらない。政五郎の方がバツが悪い。

女中が去ると、ようやく政五郎は問いかけた。「そうするとあなたは、ここに再縁したんだね？」

「はい。嫁いで三年になります」

女がまつたく悪びれないので、政五郎は少なからず混乱してしまった。真つ先に尋ねるべきことがあるのだが、それが口から出てこない。まだ、大きな勘違いが起こっているような気がしてならない。

だいいち、この朧ろうたけた年増としまがおきえであるのなら、女の方からこそいのいちばんに、政五郎に訊くべきことがあるはずだ。訊きたいことがあるはずなのだ。

三太郎はどうしているか、と。

五つの歳に手放して、今では十四歳になつてゐるおきえの子だ。五人兄弟姉妹の三番目。だから三太郎という名前だった。

おで、この愛称で親しまれる、政五郎の幼い手下てかである。おきえは彼の生みの母なのだ。

兼三が獄死したとき、おきえは泣き泣き訴えた。子供たちは、あたしの女手ひとつで立派に育ててみせます。だけでも、三太郎だけは手に負えませぬ。親分さん方のお手を煩わづらわせるのも何ですが、どうか三太郎にいい養子か奉公の口を探してやってください。

五人のうちの一人だけ。どうして捨てるのか。なぜ手に負えないというのか。

三太郎は頭が鈍のろいからだと言つた。これから先の厳しい暮らしに、兄弟姉妹が助け合つていけなくちゃならないのに、三太郎がいたらみんなの足を引つ張ることになる。

いわば三太郎は鬼っ子で、おきえは彼を見限ったということである。

九年前といえは、茂七はとつくに自分の縄張を政五郎に譲り、隠居の身分になっていた。それでもおきえが茂七を覚えていたのは、三太郎一人を手放すという彼女の決断に、茂七が大いに怒って説教したからである。大親分が塩辛声で、延々と続ける小言と説得に、しかしおきえは負けなかった。頑として折れず、三太郎がいたらみんなが困るという言い分を引つ込めることはなかった。

もつとも、茂七も折れはしなかった。回向院の親分の土性<sup>どじょう</sup>骨<sup>ほね</sup>は、両国橋を一人で支えきれなくらいに太いのだ。最初に音をあげたのは、傍らで聞いていた政五郎だった。たまらなくなつて割つて入った。もうよろしいでしょう、大親分。三太郎は私ら夫婦が引き取つて育てます。それで手打ちにしてやってください。

あとで知れたことだが、廊下でこのやりとり聞き耳を立てていた政五郎の女房のお紺は、それよりももつとずっと早いうちに肝が煮えてしまい、泣けて泣けて仕方がなくて、何度も唐紙を開けて座敷に飛び込み、

「よござんす。あんたが三太郎を要らないんなら、あたしがもらつて育てます！」

そう叫んで、おきえの横つ面を張つてやりたくてうずうずしていたのだそう。

さらにもうひとつ、政五郎とお紺があとで知つた事柄がある。話し合いから二日して、おきえが三太郎の手を引いて本所元町へ来たときのことである。

おきえは迎えに出たお紺に深々と頭を下げ、

「三太郎には、あんたはこれから、岡つ引きの親分さんの家でいろいろと教わつて、親分さんの

手下になれるかもしれないだから、良い子にするんだよと言ひ聞かせてあります」

このころからすでにおでこの目立っていた三太郎は、その大きな頭を母親に做<sup>な</sup>うようにしてぺこりと下げた。お紺は涙が溢れそうになるのを懸命にこらえていた。

「三ちゃんあんた、もうお昼はお食べかい？ おそばは好きかしら」

三太郎を奥へ連れて行き、すぐ戻つてみると、おきえは呆けたみたいに座り込んでいた。

事ここに至り、おきえが考え直すのではないかと期待して、お紺は息を詰めて待った。が、おきえはどろりとした目を宙に泳がせているだけだ。

「あの子のことは引き受けました」

お紺は言つて、おきえの顔を正面から見据えた。二、三間離れた先にも突き刺さりそうなほど鋭い目線のはずだが、おきえは何も感じないらしい。

「だから、いっぺんでいいから本当のところをお聞かせくださいよ。五人の子供のうち、あの子だけを選んで捨ててゆくというのは、いったいどうしてなんです？ 頭が鈍いなんていうのはただの口実でしょうに」

三太郎の両親と兄弟姉妹たちの顔を知っているお紺には、すでにして心当たりがあつたのだ。

三太郎一人、家族の誰にも似ていない。

それでもおきえが黙<sup>だま</sup>りを決め込んでいたので、思い切つて踏み込んだ。

「三ちゃんだけ、おとつつあんが違<sup>ちが</sup>うんじゃないかしら。それとも、あんたのお腹から出てきた子じゃないとかねえ」

おきえは唐突に、水から出た犬ころのように身を震わせて、お紺を見た。曇<sup>曇</sup>った眼<sup>まなこ</sup>のまま、独

り言のように呟いた。

「——あたしの子です」

そして、だけどあたしは浅はかなんです、と続けた。何がどう浅はかなのか追っかけて聞いた  
だそうとするお紺をかわして、おきえはのっそり立ち上がり、ごめんくださいと勝手に挨拶を言  
い置いて、去っていった。

それきりである。二度と戻らなかった。

浅はかだったという呟きには、事情はお紺の推察のとおりだという意味があるのか。それと  
も、亭主と自分の子供のなかで三太郎だけは気に染まない、だから苦労して育てることはできな  
いと思いつめてしまう心の向きが浅はかだと言っていたのか。

平らに考えるならば、前者の意味だろう。が、お紺は今でも判じかねているらしい。それな  
ら、あんな謎かけみたいないない回しではなく、もつとはつきり答えても良さそうなものだ。「だ  
けど」浅はかだという言い方に引つかかる。どうせ三太郎を捨てていくことに変わりはないの  
から、理由がない方がいいっそう座りが悪いじゃないの——

政五郎は、もう気に病むなどだけ言った。三太郎が誰の子であろうが、今はもう関係ない。そ  
して、ずっとその気持ちのまま三太郎を育ててきた。

おきえを思い出すこともなかった。

なのに、今ごろになって出くわすとは。

政五郎は目を瞠り、つくづくと目の前の女を見検めた。兼三の女房だったころの面影は欠片も  
残っていない。青黒くふくれた笑みのない顔、動きものろのろと、ものを言うときにはいつも相

手の目から逃げるようにうつむいていた、貧相な女は消えてしまった。

おきえは生まれ変わったかのようにだった。

「こちらのご主人は」

やっとなをとり戻して、そう問いかけた。

「玉井屋の当主の千蔵と申します。どうぞお見知りおきくださいませ、政五郎親分」  
堂々たるおかみの風格を漂わせ、おきえは答えた。

「あいにく、今日は寄り合いで出ております。この雨に降られていないといいんですが」

ちらりと窓の外に顔を向け、やまない雨をすかすような目をしてから、夏場でも年寄りには冷  
えは応えますからと言いつ添えた。歳の離れた夫だということをほのめかしている。

「あたしは千蔵の三番目の女房なんです。女運のない人でございましてね。でも、おかげさま  
で、あとに入ったあたしはいい暮らしをさせてもらっています」

さっきまでの「わたし」が「あたし」に変わった。媚びの色も濃くなった。

「良縁に巡り合いませんったものだ」

政五郎としては、多少なりとも皮肉を込めて言ったつもりだ。が、おきえはさらにほどけてう  
ち解けて、大いに喜んだ。

「ごらんのとおりの大年増でございますけど、捨てたもんじゃございませんでしたわね」

若返り、美しくなったことを誇っている。

「失礼かもしれないが、昔からの行きがかり上、お尋ねしないわけにもいかない。子供さんた  
は達者でいなさるのかね」

おきえの目尻に、すつと陰が浮いてすぐ消えた。

「まあ親分さん、そんな遠慮は要りません。お尋ねになるのが当たり前です。ええ、あたしの子供らはみんな達者でございます。それぞれ一人前になりました」

「じゃ、一緒にこちらに？」

「いえいえ、さすがにそれは」

おきえは優美に手をしならせて、政五郎の問いを払い落とすような仕草をした。顔はまだ笑っている。

「奉公に出たり、他所へ養子に入ったりしております。みんな、あたしと同じようにいい暮らしをしておりますよ」

それも千蔵の計らいによるところが大きいのだと、自慢げに言った。

「それは良かった」

そうとしか言いようがない。

「この玉井屋のお子さんは」

「あらまあ、さすがにもう子供は無理でございますよ、親分さん」

おきえが笑いながらくねくねと言うのを、政五郎はちつとも笑わずに見つめていた。

「先のおかみさん方のお子さんもういなさらないのかな」

「病弱なおひとだったらしいんですよ、お二人とも。でも、跡取りの心配はございません。親分さん、あたしのいちばん下の娘を覚えておいででしょうか」

兼三が獄死した当時、末の子はまだ乳飲み子だった。あの赤ん坊は確か女の子だったはずだ。

「お末と申します。やっと十になりました。今は玉井屋の親戚筋の家で預かってもらっているんですけどね、おいおいあの子を呼び戻して、年頃になったら婿をとらせて跡を継がせると、千蔵は決めております」

その折には「末」という名前も変えてやるのだと、おきえは言った。目がきらきらしている。「それは重ねて幸せな話だが、跡取りにする娘さんなら、あんたが手元で育てればよさそうなのだ」

おきえは上目遣いで政五郎を見た。その目線の送りには、蛇がちろりと舌を出したような感じがあつた。

「まだ小さい子を家に入れると、手がかかりますでしょう。千蔵が、しばらくは夫婦でのんびりしたいと申しまして」

「そうかね。私なんざ、そんな小さな女の子が手元に来たら、娘と孫がいつぺんにできたようで、嬉しくてたまらないと思うが」

「あらそれは、あたしがおりますから」

しゅらつとした顔つきで惚気ている。

「千蔵にとつてはあたしが娘みたいなものですよ」

「ご主人はおいくつかね？」

「七十になります」

さつき空を仰いだとき、黒雲がむらむらと寄せてくる様を、政五郎は見た。今はそれと同じ光景が、彼の心のなかで広がっている。その黒雲がはらんでいるのは通り雨ではなく、反感と嫌悪

だ。しかしそれが、おきえの毒気にあてられていた政五郎をしゃっきりとさせてくれた。「三太郎のことは気にならないかね」

言葉つきは穏やかに、そう問いかけた。政五郎の目は真っ直ぐにおきえを射抜いている。

さすがに、おきえは一瞬だけたじろいだ。それから、待つてましたとばかりに大げさにしなだれてみせた。片手を襟元にあてると、

「ああ、親分さんがいつそれを言い出してくださるかど、あたし気を揉んでおりました」

「それは済まなかつたね。私からは切り出しにくくて」

「どうしておりますんでしよう、あの子は」

さも案じているという口ぶりだ。またぞろ、蛇の舌がちろりと政五郎を覗う。

問いかけたときには、素直に教えるつもりだった政五郎である。が、おきえのその反応に、刹那に心を変えた。

「あの子も縁あつて養子に行った。私の手元にいたのはほんの少しのあいだでね」

もう江戸にはいないよ——と言いつけてやると、おきえの顔に白地な安堵の色が浮かんだ。政五郎は密かに訝った。どちらに安堵したのだろう。三太郎が養子に行ったということか。それとも、江戸にはいないということの方が。

「じゃ、親分さんもあの子の消息は？」

「達者でいることは知っているが、行き来はしていない。なにしろ遠方だから」

さいでございますかと、おきえはさらに胸をなで下ろしたような顔をした。政五郎はいくつか呼吸するあいだ待ったが、おきえが続けて、どうしてそんな遠くに養子に行ったのか、そこはど

んな家なのかと、問うてくる様子はなかった。

もう潮だ。胸が悪くなつて我慢が切れそうだった。雨はやみそうにないものの、幸い、一時ほどの激しい雨脚ではない。おきえに礼を述べて、政五郎は腰をあげた。

おきえは引き留めにかかった。「その料理屋に女中を使いに出してありますの。お口汚しですが、お昼を召し上がっていただくさいな」

「めっそもない。雨宿りだけでいいご馳走にあずかりました」

おきえは送りに来なかった。政五郎は店先まで一人で戻った。誰に見られていなくても、嫌なものから逃げるような足取りになるのが小癩だったから、強いてゆつくりと歩いていった。

案内してくれた老奉公人にも声だけかけて行こうとすると、傘をお持ちくださいと勧められたが、政五郎は振り切つて外に出た。玉井屋から離れると、堪えてきたものがいつぺんに胸の奥からわき上がり、喉のすぐ縁まで寄せてきて、溢れ出そうになった。驚きと怒りと不審と、それらをも圧倒するほどの強さで、不憫な三太郎への哀れみと。

いやしかし、おでこを哀れんでやることはない。政五郎は気を取り直す。今のおでこの暮らしは幸せだ。政五郎夫婦が与えた幸せではなく、あの子が自分でつかんできた幸せである。そこにこそ、秤に載つける価値のあるものが確かにある。

思い出してみれば、ちょうど去年の今ごろだった。おでこが急に飯を食わなくなり、うつうつと何かに悩み苦しんでいた時期がある。政五郎は片恋をしているのではないかと思ひ、お紺は生みの母親を恋しがっているのではないかと案じていた。飲まず食わずで寝れて弱り、とうとう目を回してひっくり返ってしまうまでになったので、町医者 of 幸庵先生にも相談してみた。

結果としては、政五郎とお紺の心配は、ふたつながらに外れていた。おでこの悩みはまったくの別物で、あの子はそれを、自分自身のおつむりの働きで乗り越えた。井筒の旦那にちつとばかり手助けをいただいたが、あの子は自分の目を曇らせていたものを自分で晴らした。それ以来、あいつはちつと大人びたようだ。政五郎は思っている。

ほんの少しだが、それを寂しいと感じるほどに、政五郎のなかにも「父親」の部分が育っている。今さらのようにそれに気づき、自分で自分に照れたものだった。

小雨のなか、小手をかざして、政五郎は自分に言い聞かせた。おでこの人生はおでこのものだ。あの子の消息を知らない、おきえに嘘をついたことを後悔しない。この先、するかもしれないが、するとしてもしないことにする。おきえは三太郎の母親にはふさわしくない。たつた今、この政五郎がそう決めた。

自分に語りかける自分の心の声だけに聞き入っていたものだから、後ろから呼ばれていることに気づくのが遅れた。親分、親分と、あとをついてくる者がいる。

玉井屋の老奉公人だった。たまたま番傘を後生大事に胸に抱え、自分は雨に濡れている。

「おや、どうなすった」

大川橋のたもとを過ぎ、広小路も抜けて田原町へときしかかかっていた。政五郎は、方角のことさえ考えずに歩いていたので。

「さ、先ほどは失礼いたしました」

老奉公人は息を切らしながら頭を下げる。だいぶ走らせてしまったらしい。

「こいつは済まねえことをした。傘はいいと言ったのに」

相手の肩を抱くようにして、すぐ先の軒下へと連れて行く。雨脚が弱くなったので、雨宿りの人びともぐんと少なくなった。そこには政五郎と老人の二人だけだった。

「て、手前は番頭の、ぜ、善吉と申します」

ぜいぜいあえぎながら、番頭は律儀に名乗った。

「親分さん、の、お耳に、入れておきたいことが、ございまして」

政五郎は善吉の背中をさすってやった。老人は大きく息をつく、手で顔を拭った。目方なら政五郎の半分ほどしかなさそうな骨細で小柄な老人だが、腕や肩のあたりにはしっかりと肉がついている。働きの者に違いない。

「親分さんは、やはり手前どものおかみをご存じでございましたか」

「ああ、ちつと昔の縁があつてな」

善吉は、白髪交じりの長い眉毛をぎゅつと寄せた。息が苦しいせいではない。

「おかみは——いえ、おきえさんは昔、何ぞ親分さんにお手間をかけさせるようなことをしませんでしたでございましょうか」

ひと息に聞うてから、急いで続ける。「若い頃の番頭が、主人の若い後妻のあらを探して言い立ててやるうなどという、ケチな魂胆があるわけではございません。あのお人が、玉井屋に来るまで平らな暮らしをしていたわけではないことは、手前もよく存じております。それでも、お上の御用を務める親分さんにお手間をおかけしたことがあるというのなら、話はまた別になります」

おかみと呼ばずに名前と呼び、すぐ「あのお人」に切り替わった。それだけで、善吉がおきえ

をどう思っているかが伝わってくる。

「おかみさんは何をなすつたわけじゃない。私とは、ただ知り合いだけだというだけだ」

またそうでなければ、おきえの方から政五郎を認めて会いたがるわけがない。それを言つてやると、善吉はいくぶんほっとしたようだったが、そのちまちまと細く生真面目そうな目元からは、頑た々な色が失せない。

「左様でございますか。これはとんだ手前の早とちりでございました」

「いや、歳の離れた後妻さんを入れて、ご主人はお幸せに違いないが、奉公人には気苦労もあるだろう。番頭さんとしては当たり前の心配だ。気にしないでおくれよ」

「ありがとうございます」

善吉は身を折って一礼した。表情は緩まない。まだ何かありそうだと、政五郎も聞き入る姿勢のままでした。

が、あとに続いた善吉の言葉は、政五郎のまったく予想だにしないものだった。

「どのみち、あのお人はもう、そう長いこと玉井屋のおかみではおりません」

勢い込んだ口調ではない。決まっていることを淡々と説明しただけだった。

「と———いとうと？」

政五郎はそれしか切り返せなかった。善吉は首にばねの入った張り子のようにせわしなくうなずき、ようよう目を上げて政五郎を仰いだ。

「玉井屋ではよくあることなのでございます。手前どもの主人の千蔵には、そういう道楽がございます。ですからおきえさんも、そろそろ潮時でございます」

政五郎の方が眉をひそめる番だった。

「道楽つてのは、つまりその、女好きということだね？」

好きな女ができるとすぐ女房にしたくなり、離縁再縁を繰り返すという意味なのだろう。

「まあ、お盛んなことだ。甲斐性あつてこそその羨ましい道楽だが」

年齢よわい七十にもなつて、しぶとい艶福家である。珍しいのは、わざわざおかみに迎えることで、普通なら、女を取つ替え引つ替えするだけなら妾めかけに困うものだろう。

「玉井屋の旦那は、手活けの花はお嫌いなのかな」

からかうような意味も込めて、政五郎は笑った。善吉は笑わなかった。笑おうとはしたが、上手いかなかつたように見えた。

何だかひつかかる。

「おきえさんが、そう遠くないうちにおかみでなくなるといふのは、もう後釜がいるということなのかね」

小指を立てて、政五郎は尋ねた。そのわざとらしい仕草にも、善吉は笑わない。苦笑も失笑もないのだ。

「じゃあ、旦那はおきえさんに飽きちまつたのかねえ」

善吉は返事をせず、堪えている。相對する者のこういふ顔、こういう様子を、政五郎はお役目のなかで何度か見てきた。言いたいことがあり、聞いてもらいたいのだが、とうてい信じてもらえないだろうと怯えているのだ。善吉のようなお店者の場合には、迂闊うかつに漏らしてはお店の看板に傷をつけてしまうかもしれないという不安を抱えていることもある。それでも喉もとまでこみ

あがつてくる何かを抱えているのだ。

「番頭さん。私でよかつたら、何でも打ち明けてくれてかまわないんだよ」

政五郎は真顔に戻り、小柄な善吉に合わせて少しだけかんだ。

「私はこのあたりが縄張じゃねえし、今日は本当に通りがかりに雨宿りをさせてもらっただけなんだ。さつきも言ったが、おきえさんとはお役目で悪因縁があったわけでもねえ。たまたま会って、私の方が腰が抜けるほど驚いたよ。幸せそうで何よりだとは思ったが」

しかし、そこにはどうやら影がさしているようだ。善吉は影の正体を知っていて、自分の胸ひとつに納めているのが辛いらしい。政五郎が岡っ引きだと知って後を追ってきたのは、もちろんおきえとの関わりを尋ねたかつたからだろうけれど、実はそれがきっかけで、善吉の胸の蓋がうっかり開きそうになったということでもあるのだろう。

しかし、開きかけた蓋を、善吉はしっかりと閉め直した。彼の顔を間近に覗き込む政五郎には、閉じる音まで聞こえる気がした。

「いえ、今のお話だけでございます」

奉公人が、余計な差し出口ではございますがと、にわかには硬い口に立ち戻り、

「そういう次第で主は気まぐれでございますから、手前はおきえさん——おかみさんの身を察じておりました。親分さんがおかみさんの昔からの知り人なら、何かのときには相談に乗っていただけかもしれないと、分を超えたことを考えてしまいました。まったく、いい歳をして分別もなければ弁えもないことでございます。重々お詫び申し上げます」

とってつけたような口上を早口に述べると、政五郎の手に番傘を押しつけて、くるりと踵を返

して駆け出した。いや、逃げ出した。

政五郎は啞然と取り残された。

まるで解せないわけではない。一応の辻褄は合っている。が、わずかに合わせ残ったほころびが、政五郎の心をちくりちくりと刺している。

——昼日中から、何かに化かされたようじゃねえか。

通り雨が狐狸でも運んできたか。それともあの黒雲のなかに、猫又が隠れていたか。

雨がやんで出直して来てみたら、玉井屋なんて空樽問屋は消えているかもしれない。首を振り振り、政五郎は歩き出した。